

攫猿

神永学

真美^{まみ}が目を覚ますと、真つ暗な部屋の中にいた――。

いや、あまりに暗すぎて、そこが部屋なのかどうかさえ判然としない。床があることは分かるが、天井も壁も見えない。

自分の指さえ闇に霞^{かす}んでしまっていた。

どうして、こんな場所にいるの？ 考えてみたが、答えを見つけない。出ることができなかった。

朝起きて、大学に行ったところまでは覚えているのだが、その後のことが思い出せない。

「何処^{どこ}？ ここは何処なの？」

真美は、周囲を手で探ってみたが、空を切るばかりだった。

みるみると膨らんだ不安が、心を内側から破裂^{はれっ}させようとしている。

涙腺^{ゆゑ}が緩み、涙^{なみ}が零れ落ちる。

「お願い。誰か返事をして……」

真美が声を上げると、それに応えるように、目の前に明かりが灯ともった。

赤くて丸い光が二つ――。

それは目だった。

ぎぎぎい――と金属が軋きしむような音を立てながら、赤い目をした何かが近付いて来る。

薄っすらとではあるが、迫るモノの姿が見えた。それは、人に似た形をしていたが、全く別の何かだった。

「な、何なの？」

真美は、踵かかとを返して逃げようとしたが、暗闇の中から伸びてきた白い腕に、足首を掴つかまれて転んでしまった。

何とか振り払って逃げようとしたのだが、腕はどんどん数を増し、真美の手を、足を、髪を次々と掴んで来る――。

終には、幾本もの腕に絡め取られ、身動きが出来なくなった。

真美は、そのまま宙に持ち上げられる。掴まれた手が、足が、千切れるように痛かった。

「痛い！ 止めて！」

必死に叫んだが、痛みは弱まるどころか、強さを増していく。遂には、メキッという何かが折れるような音がした。

痛みのあまり、意識が遠のいていく。

赤い目が、ぎっと真美に近付いて来て、
耳許みみもとで囁ささやいた。

〈私の子どもをウんで——〉

へようこそ。怪奇チャンネルへ——

サングラスに黒いマスクを着け、頭からすっぽりフードを被った男が語り出した。背景が暗いせいで、それが室内なのか、屋外なのかすら判然としない。

後から合成したと思われる、おどろおどろしい音楽が流れているが、フリー素材を流用しているらしく、やけに安っぽい。

へナビゲーターのショウセキです。このチャンネルは、世の中で起こる不可解な出来事について、独自のルートで入手した情報を許に、考察したものなんだよね。信じるも、信じないも、視聴者の自由に任せるけど、これだけははっきり言っておくよ。世の中には、我々の想像を超える現実があるのだ——と

ショウセキは、そこで一旦、言葉を切ると、三秒ほどの間を置いてから再び語り始める。

「今日、扱うのは、世間を賑わせている連続女性失踪事件についてなんだ。知らない人のために、一応、解説しておく。東京都、〇〇区では、十代後半から二十代前半の女性が、わずか三ヶ月で五人も行方不明になっているんだ。」

警察は、年頃の少女の失踪はよくあることだと、お気楽に構えているようだけど、同一地域で、何の前触れもなく、突如として複数の女性が姿を消すというのは、どう考えても不自然だ。

ネット上では、変質者による連続無差別誘拐事件だと騒ぎになっているけど、これも外的外れなんだよね。では、真相は何か――」

シヨウセキは、ずいっと顔を近づけてくる。

光の加減で、サングラスのレンズ越しに、シヨウセキの細い目が一瞬だけ垣間見えた。目の下に、泣き黒子がある。

「実は、失踪した女性たちには、ある共通点があったんだよね。」

オレの調べたところによると、失踪した女性たちの身体には、赤い斑点ができていたらしいんだ。些細な点だけど、とても重要なことなんだよね。オレはこの話を聞いて、ピンときた。

これは、カクエンの仕業だ――と。

カクエンというのは、五百年生きた猿が、妖怪化したもので、人を騙し、人間の女性を攫さらうらしいんだ。

攫う猿で——カクエンというわけだ。

攫猿には、メスがいないので、人間の女性を攫って、自分の子どもを産ませるらしいんだ。

どうして、今回の事件が、攫猿の仕業だと思ったかつて？

調べてみたら、攫猿は、女性を攫う前に目印を付けるらしいんだ。

十円玉ほどの大きさの赤い痣あざだ。ここまで言えば、分かるだろ。この失踪事件は……

陽咲ひなたは、最後まで話を聞くことなく、スマホに表示された動画を閉じた。

友人の夏菜なつなから、今、騒がれている失踪事件の真相を語っている「ショウセキ」と名乗る配信者の動画が面白い——とラインのメッセージで送られてきたので、一応、見てみたのだが、流れてきたのは、テレビの怪奇特番の劣化版に過ぎなかった。

具体的な根拠もなく、実際に起きている事件を、怪異だと断じるのは、あまりに考察も配慮はいりも足りない。

何より、配信者の口調が好きになれなかった。

インテリを気取っていて、上から目線だけでなく、ねちっこい

言い回しが気に障る。明日、感想を聞かれるだろうけど、適当に面白かったと答えることにしよう。

実際に感じたこととは異なるが、別にそれでいい。

正直に自分の意見を言えば軋轢を生む、ということは、中学高校で、嫌というほどに学んだ。

学校では孤立し、友だちと呼べる人は、一人もできなかった。

だから、大学に入学してからは、自分の考えに反していても、取り敢えず同調するようにしている。

そのお陰で、孤立することはなくなったけれど、本心を隠しているので、居心地の悪さがつきまとう。

どちらがいいのかは、自分でも分からない。

スマホに充電ケーブルを挿したところで、メッセージが着信した。

大学のサークルの武石章という先輩からのものだった。

メッセージを開く気には、なれなかった。

武石は、外見こそ、そこそこだが、サークル内での評判が悪い。

手当たり次第に連絡してきて、口説いてくるというもっぱらの噂だ。以前は、真美という先輩に、しつこく言い寄っていて、トラブルになったのを、陽咲も目の当たりにしている。

正直、かかわりたくない。

ため息を吐いたところで、スマートウォッチが振動した。

ずっと座っていたので、スマートウォッチと連動した健康管理アプリが、運動することを促している。

歩数や脈拍を計測して、消費カロリーなども計算してくれる便利なものだが、一時間毎に、運動を促されても鬱陶しいだけだ。

陽咲は通知を無視して、ノートパソコンをスリープモードから立ち上げた。

カーソルを、MMORPGのFD14（ファイナルデイスティニー）に合わせると、ダブルクリックして起動し、ログインした。

周囲に同調することを学んだお陰で、仲間はずれにされたり、悪口を言われることはなくなったが、その分、ストレスが溜まる。

どうでもいい他人の恋愛話や、ファッション、スイーツの話に付き合わされるのには、うんざりしている。

合コンに駆り出されて、下心丸出しの男たちから逃げるのも、面倒で仕方ない。そうした鬱憤を発散しているのが、MMORPGだ。

ギルドのメンバーと、モンスターを討伐しているときは、余計なことを何も考えずにいられる。

チャットでの会話も、作戦や指示に関することがメインなので気が楽だし、顔が見えない分、自分を偽る必要もないので楽だ。

陽咲のIDは、そのままHINATAだが、男なのか女なのか訊ねられることもない。リアルに顔を合わせるより、こういう関係の

方が、陽咲には気楽だった。

2

「だるー。何で、あんな講義取っちゃったんだろう」

陽咲が学食でサンドイッチを食べていると、夏菜が隣の席に座りながらぼやいた。

「そうだね」

陽咲は同調の返事をする。

夏菜が、どんな基準で受講する講義を選んだのかなど知らないが、佐藤准教授のシステム論は、多くの学生に不評らしい。

「あの准教授、ぼそぼそ喋るから、眠くなるんだよね。おまけに、課題とかめちやくちや多いし……」

「そうだね」

「嘘。陽咲は、あの講義、結構楽しんでるでしょ」

夏菜が笑いながら言った。

凶星だった。他の人は、陽咲が同調すれば、それで納得してくれるのだが、なぜか夏菜だけは違う。いつも陽咲の本心を見抜く。

それでいて、中学、高校のクラスメートみたいに、陽咲を遠ざけたりしない。それは、それでいいんじゃない——と受け容れてしま

う。

「そうかな……」

「それよりさ、昨日の動画、ヤバかったでしょ」

夏菜が、特に気にした様子もなく、話題を変えてくる。

「あ、うん」

ある意味、ヤバかったと思う。

テクノロジーがこれだけ発展した現代で、あんなことを真剣に語っている人がいることに、心の底から驚いた。

人を攫う猿など実在するはずがない。

「また嘘」

「え？」

「だって、つまんないって顔してるもん」

夏菜が陽咲の頬を指で突く。

「そんなつまんなそうな顔してた？」

「うん。分かり易いよ。まあ、陽咲はリアリストだから、ああいう

話は信じないと思ってたけどね」

「だったら、何で見せたの？」

「サークルの真美先輩って分かる？」

「あ、うん」

急に話が変わったが、取り敢えず相づちを打つ。

真美先輩は、陽咲たちの一つ上で、すらっとした長身の美人だ。武石に限らず、男性人気が高い。

「この前聞いたんだけど、真美先輩も行方不明になってるらしいんだよね」

「そうなの？」

最近、学校で姿を見ないとは思っていたけれど、まさか行方不明になっているとは、思いもなかった。

「私、結構、仲良かったからショックでさ……」

「……」

そう言えば、夏菜と真美先輩は、よく一緒にいた印象がある。

顔見知り程度の陽咲でさえ、驚きを隠せないのだから、夏菜が受けているショックは、相当に大きいだろう。

「でね、真美先輩が行方不明になる前に、首の裏に赤い発疹ほっしんができていたのを思い出したんだよね。原因が分からないって言ってたけど」

きっと、真美先輩にあった発疹と、配信者のショウセキが言っていた、攫猿さつじんがつける目印を関連付けたのだろう。

「でも、それって……」

「それだけじゃないの。ずっと人の気配を感じるって。誰かに監視されているみたいって言ってたんだよね。だから、もしかして――」

って思ったんだけど、陽咲はどう思う？」

夏菜に意見を求められ、返答に詰まってしまう。

適当に同意すればいいのだろうが、夏菜が相手では、嘘が見破られてしまう。

「攫猿というより、人間の仕業なんじゃないかな。ストーカーに付け狙われていたとか」

「やっぱりそう思うよね。でもさ、気になることがあるんだよね」

「何？」

「実はさ……私もなんだよね」

「え？」

「ほら。腕に何か発疹みたいなのができてるでしょ」

夏菜が腕を見せてきた。

確かに、左の上腕部に赤い発疹のようなものができている。虫刺されにしては、少し大きい。

「それだけじゃなくて、家で変なことが起こるようになったんだよね」

「変なこと？」

「うん。テレビとかスマホにノイズが走ったり、変な音が聞こえたりするの」

「心霊現象みたいなこと？」

「かもね。でも、他にもあって、私もずっと誰かに見られている気がするの。学校にいるときも、帰宅途中も、家の中でも。上手く説明できないんだけど、ずっと監視されてる感じ」

それは、攫猿がどうこうではなく、単純にストーカーな気がする。ノイズについても、盗聴器とか、隠しカメラが仕掛けてあって、その電波干渉を受けていると考えれば説明がつく。

何れにしても――。

「すぐに警察に通報した方がいいよ」

「したんだけどさ……気がするってだけじゃ、動けないって言われちゃった。確証がないとダメなんだって。でもさ、確証があったときには、手遅れな感じがしない？」

「そうだね。何かあってからじゃ遅いし、何処かに一時避難するとか？」

「それありだね。あつ、陽咲の部屋に居候いそろうしていい？」

「別にいいけど……」

「やった！ ありがとう。やっぱ、持つべきものは友だちだね。じやあ、後で連絡する」

夏菜はそう言うと言席を立ち、ひらひらと手を振りながら歩いて行った。

夏菜が陽咲のことを、友だちと呼んでくれたことが、素直に嬉し

かった。

友だちが家に泊まりに来るなんて、初めての経験かもしれない。自然と頬が緩み、心が躍った。

座ったまま、ぼんやりと夏菜を見送っていると、彼女の前に一人の男性が立った。

「見覚えのある顔——武石だ。」

武石は、しきりに夏菜に声をかけている。陽咲だけでなく、夏菜にもちよっかいを出しているようだ。

武石は、本当に見境みさかいがない。

夏菜は、苦笑いを浮かべつつ、その場から逃げだそうとしたが、武石は、そうはさせまいと彼女の腕を掴んだ。

「何するんですか」

夏菜が抗議の声を上げた。

陽咲は、助けに入ろうと腰を浮かせる。

「いや、おれは、ただ、君のために……」

「私のためとか言うなら、もう付き纏ぼうぜんわないで下さい」

夏菜は、ぴしゃりと言うと、呆然とする武石を残して、駆け足で食堂を出て行った。

もしかしたら、武石が夏菜をストーカーしている可能性もある。

後で、夏菜と話してみよう。

陽咲は、武石に見つからないように、そっと食堂を出た。

3

バイトを終え、スマホを確認すると、夏菜から着信履歴があった。メッセージも届いていた。きつと、昼間に話した一時避難についてのことだろう。メッセージを確認してみる。

〈真美先輩から、連絡がきた〉

行方不明になっていたはずの先輩から、連絡がくるというのは、いったいどういうことだろう？

取り敢えず、電話を試みよう。

陽咲が電話をすると、ワンコールで夏菜が出た。

「もしもし」

〈メッセージ見た？〉

「うん」

〈何か、真美先輩、行方不明とかじゃなかったみたい〉

「え？ そうなの？」

〈うん。普通に、体調崩して学校休んでいただけなんだから。それで、さっき連絡がきたの〉

「そうだったんだ」

へで、久しぶりに会うことになったんだ。攫猿とか、妙な噂に振り回されたわー」

夏菜が、明るい口調で言った。この感じだと、陽咲の家に一時避難するという話は、流れることになりそうだ。

「そう。良かったね」

へうん。色々話を聞いてくれて、ありがとうね。じゃあ、また連絡するね」

夏菜は、そう言って電話を切った。

スマホを持ったまま歩き出した陽咲だったが、妙な引っかけかきを覚えた。

夏菜は、真美先輩と連絡が取れたことで、安心しきってしまったようにのだが、本当にそうなのか？

夏菜自身が体験した怪現象や、監視されているような感覚は、なくなっていないのではないか？

疑問はそれだけではなかった。

真美先輩は、体調不良で学校を休んでいただけ——と夏菜は言っていたけれど、それは本当だろうか？

陽咲は、スマホでネットニュースを検索してみる。

「あつた……」

へやまおか山岡真美さん（21）の行方が分からなくなっており、家族から捜

索願いが提出された。警察は、一連の失踪事件との関連を……

ネットニュースには、確かに真美のことが書かれている。

家族から捜索願いが出されているのに、体調を崩して寝ていただけ——なんてことがあるのだろうか？

——何かがおかしい。

陽咲は、もう一度、夏菜に電話をしてみたが、電波が繋がらないという、機械のメッセージが流れてくるだけだった。

取り敢えず、〈話したいことがある〉とメッセージを送ったところで、陽咲は、背中にじつとりとした視線が突き刺さるのを感じた。

慌てて振り返ると、電柱の影に隠れるようにして立っている人の姿が見えた。

頭からすっぽりフードを被っていて、顔は分からない。それでも、じつと陽咲を見据みすえていることだけは分かった。

——どう考えても怪しい。

食堂での夏菜との会話が脳裏を過よる。

もしかして、夏菜が言っていた、監視されているような感覚とは、このことだろうか？

陽咲は、スマホで一一〇を押し、後は発信するだけの状態にする
と、急いでオートロックを解除して、自宅のマンションのエントラ

ンスに入った。

エレベーターのボタンを押し、おそろおそろ振り返ると、さっきのフードを被った人が、エントランスの向こうに立っていた。

——何？ 何で、こつちを見てるの？

スマホを握る手に、じつとりと汗が滲む^{にじ}。

エレベーターが到着するまでの時間が、とても長く感じられた。待っている間、ずっと背中に視線が突き刺さっている気がした。

陽咲は、ようやく到着したエレベーターに飛び乗ると、自分の部屋がある四階と、〈閉〉のボタンを押す。

エントランスを視界に入れないようにしていたのだが、扉が閉まる瞬間、目を向けてしまった。フードの人物が、真っ直ぐに陽咲を指差したような気がした。

エレベーターに乗っている間も、心臓がバクバクと脈動していた。何度も背後を確認しながら、部屋に飛び込み鍵をかけると、安堵^{あんど}から、その場にへたり込んでしまった。

何だか耳鳴りがする。

電気を点ける気にはならなかった。

もし、そんなことをすれば、フードを被った人物に、自分の部屋の所在を教えることになってしまう。

陽咲は、慎重に窓のところに移動し、カーテンの隙間^{すきま}から外を覗^{のぞ}

き見た。フードの人物の姿は見えなかった。

安堵のため息を吐いた陽咲は、そのまま身体を引き摺るよう
にして、ユニットバスに入り、洗面台に両手を突いて項垂れた。
シャワーでも浴びて、少し気持ちを落ち着けよう。

顔を上げた陽咲は、思わずぎよつとなる。

鏡に映っていたのは、自分の顔だけではなかった。

すぐ後ろに、頭からフードを被った男が立っていたのだ――。あ
まりのことに、動けなくなった。

振り切ったはずなのに、部屋の中までついて来たのか？ いった
いどうやって？ 部屋の中に入ったときには、一人だったはずなの
に――。

鏡に映った男は、ゆつくりとフードを外した。

その下から現れたのは、人間の顔ではなかった。

毛むくじやらで、真っ赤な肌をした、猿の顔だった。

「いやっ!」

陽咲は、自分の悲鳴を遠くに聞いた。

4

陽咲は、食堂の椅子に座ったところで、ため息を吐いた。頭がぼ

うっとする。

陽咲は今朝、ユニットバスで目を覚ました。

あのまま、気を失ってしまっていたらしい。当然のように、部屋の中にフードを被った男——いや猿の姿はなく、ドアの鍵も閉まっていたし、ドアストップパーもかかった状態だった。

多分、あれは幻覚なのだろうと思う。

頭では分かっているけど、身体に染みついた、あの瞬間の恐怖心は消えることはない。それに——。

陽咲の左のこめかみの辺りに、発疹のようなものができている。これってもしかして……違う。

陽咲は、頭に浮かんだ考えを強引に振り払った。また、耳鳴りがする。

気にかかることは、それだけではない。

昨晚から、夏菜にメッセージを送っているのだが、返信どころか既読さえ付かない。電話をしても、電波云々のメッセージが流れるだけだ。

これまで、夏菜がこんな風にメッセージを無視したことは、一度も無かった。何かあったのではないかと気が気ではない。

両手で顔を覆ったところで、スマホにメッセージが届いた。送り主はギルドメンバーのT A K Eだった。

昨晚の出来事を、一人で抱えていることができずに、ことの顛末てんまつを、ギルドの仲間たちにメッセージとして送って送っていた。

他のメンバーは、ゲームやり過ぎとか、適当な返信ばかりだったのだが、T A K Eだけが真剣に聞いてくれた。

陽咲は、スマホを手に取りメッセージを開く。

「攫猿について、調べてみました。ショウセキという配信者が言っているように、猿から人間に変化した妖怪のようで、人間の女性を攫う習性があるようです——」

T A K Eのメッセージは、いつも淡々としている。

「AIで自動生成されたのではないかと勘繰ってしまうほどだ。だが、混乱している今の状況には、これくらいの方がちょうどいい。メッセージの内容からして、ショウセキの動画までチェックしてくれたようだ。」

「ショウセキは、女性を攫うという事象から、一連の女性失踪事件を関連付けたものと思われます。しかし、一つ、引っかかることがあります。ショウセキの動画には、攫猿に狙われた女性には、赤い発疹ができると語っていますが、そのような伝承はありません。」

——そうなんだ。

陽咲は、内心で呟つぶやきつつ先の文章を読む。

「あくまで推測ですが、ショウセキは、別の妖怪である姑獲鳥うぶめと混

同しているものと思われま。姑獲鳥というのは、難産で死んだ女が妖怪化したものと言われていますが、これは攫猿とは異なり、子どもを攫うとされています。この姑獲鳥が、攫う子どもに血で目印を付けたとされています。二つの妖怪を同一視している節があります。

ショウセキの動画から、ここまで推察するとは……TAKEは、妖怪に精通しているらしい。だから、陽咲の話をちゃんと聞いてくれたのかと納得する。

へまたHINATAさんが部屋の中で見た、フードを被った猿についてですが、ご自身でも疑っていたように、幻覚である可能性は高いと思います。しかし、部屋の外で見かけたフードの人物については、現実の人間である可能性もあるので、警察に通報することを強くお勧めします。また、何か分かったら連絡します――

TAKEの文章は、そう締め括られていた。

正直、何も解決していないが、理路整然としたTAKEのメッセージを見て、少しだけだが落ち着いた気がする。

席を立とうとしたところで、スマートウォッチが振動した。

どうせ、また健康管理アプリが、運動していないことを指摘しているのだろうと、画面を確認してみる。

表示された時刻が文字化けしていた。

——バグかな？

画面を指でタップしていると、元の時計の画面に戻った。

「陽咲ちゃん」

急に声をかけられ、ビクッと肩を震わせる。

顔を上げると、すぐ脇にパーカーを着た武石が立っていた。

「あ、こんにちは」

適当に会釈えしやくをすると、武石は隣の席に座った。この人の、こういう図々しいところが苦手だ。

「さつき、陽咲ちゃんのスマートウォッチ、変な表示出てなかった？」

「別に、普通です」

「そう？ だったらいいんだけど。それより、それどうしたの？」

武石が、ひなたのこめかみの発疹を指差したので、慌てて手で隠した。

「何でもないです」

「それ、何の覚えもないのに、急に出たんじゃない？」

「別に……」

武石の声が不快に響いて、苛々いらいらが募る。

「もしかしてなんだけど、陽咲ちゃん、最近、身の周りで変なことが起きてない？」

「はい？」

「例えば、誰かに監視されていたりとか、パソコンとかスマホが誤作動したりとか、そういうことが起きているんじゃないかな」

「……」

ぐわんぐわんと目が回るような感覚がする。

「その発疹ってさ、もしかしたら目印かもしれないんだよね。だからさ……」

「さっきから、何を言ってるんですか！」

陽咲は、バンツとテーブルを叩いて立ち上がった。

急に、陽咲が感情を露わあらにしたことで、武石はぼつが悪くなったのか、目の下にある黒子をほりほりと掻いた。

「いや、オレは……」

「訳の分からないことを言うの、止めてもらっていいですか？ 私、講義があるので失礼します」

陽咲は、ぴしゃりと言うと、そのまま歩き出した。

同調して、目立たないようにしていたはずなのに、苛立ちのあまり、感情をぶつけてしまった。

後悔はあるが、あのまま延々と武石の話聞かされるよりずっといい。

——何が目印だ。

内心で呟いたところで、今さらのようにその言葉に既視感を覚えて足を止めた。

思い違いかもしれない。いや、でも、それにしては、あまりに共通点が多過ぎる。これつてもしかして――。

陽咲は、振り返って見たが、食堂には、もう武石の姿はなかった。

5

陽咲が家に帰り、動画配信サイトを開き、〈シヨウセキ〉のチャンネルを見ると、ちょうど、生配信の最中だった。

前回は、薄暗い部屋の中からだったが、今日は外に出ているらしく、自撮り棒を使い、歩きながら語っている。

相変わらずフードを被り、サングラスをかけ、黒いマスクをしている。よくあれで、視界が確保できるものだと感心してしまう。

〈実は、今日は、視聴者のみんなに、重大な事実を伝えなきゃならないんだ――〉

シヨウセキは、そう語り出した。

〈失踪事件の犯人が、攫猿であることは、前にも話したね。オレは、とうとうその居場所を突き止めたんだ。どうやって突き止めたかって？ 実は、オレは、攫猿が次にターゲットにしている人間が誰な

のか、分かっていたんだよね。だから、ターゲットになっている人物に、こっそりGPSを仕掛けて、その電波を辿たどったってわけだ。失踪した女性たちは、おそらくこの場所にいる——↓

ショウセキが指し示した先には、白い箱のような建物が映り込んでいた。

「やっぱり……」

陽咲は呟きながらため息を吐いた。

別に彼の語っている内容が知りたくて、こうして配信を見ていた訳ではない。ただ、確かめたいことがあったのだ。

そして、その目的は達成された。

生配信で、ショウセキが足を踏み入れた場所に、陽咲は見覚えがあった。大学の外れにある、閉鎖された研究棟だ。配信場所として、ここを選ぶあたり、陽咲たちと同じ大学の生徒であることが推察される。

独特の喋り口調が似ているし、着ているパーカーも、今日、食堂で会ったときに身につけていたものと同じに見える。

それに、左の頬にある黒子の位置が一致している。

つまりショウセキは——武石だ。

ショウセキという配信者名も、武石章の名前の「章」と「石」を音読みして組み替えたものだろう。

それだけではない。この前、陽咲のマンションの前に現れた、フーダの男の正体も武石に違いない。

流しっぱなしにしていた配信動画から、へうわあ！〜という悲鳴が聞こえてきた。

目を向けると、ショウセキは走っているらしく、ガタガタと音を立てながら画面がめちやくちやに動いていた。

やがて、持っていたスマホを落としたのか、薄暗い天井を映し出す。

へ止せ！止めてくれ！〜

ショウセキのその叫び声のあと、まるで断末魔だんまつまのような悲鳴が響き渡り、画面がブラックアウトした。

「バカバカしい」

陽咲の口から、思わず言葉が漏れた。

できの悪いフェイクドキュメンタリーだ。あたかも、何かに襲われたかのように演出することで、再生数を稼かせごうという魂胆なのだろう。こんなものに騙だまされるほど子どもではない。

何にしても、ショウセキが武石であるとする、連続失踪事件が、別の側面を見せることになる。

武石が、自分の気に入った女性を拉致しているのだ。その上で、それを攫さら猿さるの仕業などと騙かたり、配信までしている。

真美が失踪する前、武石がしつこく付き纏っているのを目にしていた。それだけじゃない。食堂で、夏菜にも変な絡み方をしていた。

そして、その直後に、夏菜は連絡が取れなくなった。

そこまで考えたところで、陽咲は背筋が凍りつくような思いがした。

もし、自分の推理が正しいのだとすると、夏菜は、武石によって拉致された——ということになる。

すぐに警察に連絡をすることも考えたが、現状では、大した証拠もない。あくまで、陽咲の推測に過ぎないのだ。

迷った末に、陽咲はTAKEに相談を持ちかけることにした。今のところ頼れるのは、TAKEしかない。

長文になるが、陽咲の推理した内容を、メッセージでTAKEに送った。TAKEから、すぐに返信がきた。

「ショウセキは、拉致には関係ないと思います」

断定的な言い方に、違和感を覚える。

「どうしてそう言い切れるのですか？」

「今、生配信を見ていました。彼は、何かに巻き込まれたと思われる」

TAKEは、子ども騙しのフェイクを信じるといえるのだろうか？

「私も見ていました。あれは、ただの演出だと思えます」

「そうかもしれませんが。しかし、理由は他にもあります。彼のこと
は、既に警察がマークしています。その上で警察はシロだと判断し
ています」

「え？」

T A K K Eのメッセージを見て、陽咲は思わず声を上げた。

「どうして、T A K K Eが警察の動向を知っているのだろう？ もし
かして、彼は警察関係者なのだろうか？」

耳鳴りがする。

こめかみが、ずんずんと痛む。

「T A K K Eは、警察の人なんですか？」

「違います。ただの学生です」

すぐに返信があった。

余計に分からなくなる。警察ではないなら、どうして警察の動き
を知っているのか？

「H I N A T Aさんは、今、家ですか？」

「はい」

「住所を教えてくださいますか？」

「どうしてですか？」

「気になることがあるので、そちらに警察を向かわせます」

——「どう？」と？

ただの学生が、警察を向かわせるなんてできるの？ 都合のいいことを言って、ただ住所を聞き出そうとしているだけではないのか？

——もしかして。

陽咲の中に、一つの閃ひらめきが浮かんだ。それは、とてつもなく怖おそろしい考えだった。

ショウセキと武石がそうであったように、TAKEもまた、同一人物なのかもしれない。

武石だから、TAKEだったのではないか？

だから、ショウセキが事件に無関係だと主張する。陽咲の住所を聞き出そうとしている。一度、そう考え始めると、もうそうとしか思えなくなった。

誰も信用できない。

陽咲の思考を遮さかるように、インターホンが鳴った。

インターホンのモニターに目を向けたが、そこには誰も映っていないかった。誰もいないのに、インターホンが鳴るなんて不自然だ。

困惑していると、今度は、部屋のドア前のインターホンが鳴った。

——え？ 何？

誰かが、四階まで上がって来たのか？

陽咲はおそろおそろドアスコープを覗く。そこから見えるのは、

何もない外廊下だけだった。

どうして、誰もいないのに、インターホンが鳴ったの？

混乱していると、スマホにメッセージが届いた。

登録されていないIDからだった。

おそろおそろメッセージを開いてみる。

「どうして、アけてくれないの？　ねえ。アけてよ。キミはエラバれたんだよ」

——何これ？

誰が、何の目的で、こんなメッセージを送ってきたのか？　やっぱりショウセキ——いや、武石の仕業に違いない。

何処かから、陽咲のことを監視していて、こうやってメッセージを送ってきているのだ。このままでは、いつ、部屋の中に入って来るか、分かったものではない。

身の危険を感じた陽咲は、助けを求めて一一〇番に電話した。すぐに電話が繋がる。

陽咲は「助けて下さい」と必死に訴えた。

「ムダだよ。キミはニゲられない」

聞こえてきた、無機質で無慈悲むじひな声に、陽咲は思わずスマホを取り落とした。

6

陽咲はベッドに座り込み、頭から毛布を被ってガタガタ震えながら朝を迎えた――。

もう、どうしていいのかわからなかった。

あれから、何度か警察に電話を試みたが、繋がったかと思うと、あの機械的な声が流れてくる。

まるで、スマートフォンそのものを、乗っ取られてしまったようだ。

パソコンのインターネットを通じて、助けを求めようとしたのだが、文字化した画面が表示されるだけで、全く操作ができなくなっていた。固定電話もないし、外部との連絡手段が完全に絶たれている。

スマートウォッチには心拍数が高くなっています 深呼吸をしましょうというメッセージが、何度も表示されるが、この状況では、どうにもならない。

外に出て誰かに助けを求めることも考えたが、フードの男がいると思うと、怖くてドアを開けることさえできなかった。

——私は、どうしたらいいの？

内心で呟いたところで、再びインターホンが鳴った。何か映るかもしれない。そう思うと、モニターを確認するのも憚はばかられた。

両耳を塞いで、「来ないで」と何度も念じ続ける。

それを嘲あざわらるように、二回、三回と続け様にインターホンが鳴る。
「うるさいー！」

陽咲は、叫びながら近くにあったクッションを、インターホンめがけて投げつけた。呼吸が乱れる。

もう、何が何だか分からず、半ばパニック状態だった。

——どうして、私がこんな目に遭うの？

ホラー映画などで、酷ひどい目に遭う人間は、必ずその理由がある。禁忌きんきを破ったり、都市伝説を信じなかったり、はたまた、事故物件に住んでいたり——。そういうことがきっかけで付け狙われる。

だが、陽咲には狙われる理由など、一つもない。

ある日、突然、何の前触れもなく、おかしなことが起こり続ける。こんなので、どう考えたっておかしい。

零れ落ちた涙を拭ぬぐっていると、スマートフォンにメッセージの着信があった。

思わず「ひっ」と小さく悲鳴を上げた陽咲だったが、表示された名前を見て、慌ててメッセージを開く。

差出人は、夏菜だった。

「さっき、家に行ったんだけど、今、いないの？」

あのインターホンは、夏菜だったの？ 陽咲は、すぐに夏菜に電話をかける。

「もしもし」

「おは。暗い声して、どうしたの？」

「どうしたのじゃないよ。夏菜、急に連絡取れなくなるし、私の方は、何だか変なことが、いっぱい起きるし……」

喋りながら、ぼろぼろと涙が零れてきた。

「ごめん。ちよつと、色々あつて連絡できなかつたんだ」

「私、てつきり夏菜が、誘拐されちゃったのかと思ったよ」

「まさか。陽咲は大丈夫なの？」

「分からない。でも……」

陽咲は、昨晚までに起きた出来事を、早口に夏菜に語って聞かせた。返ってきたのは、笑い声だった。

「笑い事じゃないよ」

「多分、陽咲は夢でも見てたんだよ」

「あれが夢？ そんなはずない。だって……」

「ニュース見てないの？」

「ニュース？」

「うん。あの事件の犯人、逮捕されたんだよ」

「え？ 嘘！」

「本当だよ。後で記事を送ってあげる。だから、陽咲が体験したことは、全部、夢だったんだよ」

「そうなのかな……」

「そう言われてしまうと、夢であったような気もする。でも、それにしても、妙にリアルだった。」

「色々と考えようとしたけれど、寝不足のせいかな、思考が上手く働かない。」

「それより、今、真美先輩と一緒にいるんだけど、陽咲もおいでよ。ちよつと、相談したいことがあるからさ」

「え？ あ、でも……」

「今から、住所を送るから、絶対来てね」

夏菜は明るく言うと、電話を切ってしまった。

その後、すぐに住所が記されたURLが届いた。地図で確認すると、大学の敷地にある研究棟のものだった。

「犯人が逮捕されたのであれば、外に出ても大丈夫？ そもそも、

犯人は誰だったの？」

誘拐された女性は、見つかったのだろうか？

疑問はたくさんあったけれど、今はとにかく一人でいたくなかった。よろよると立ち上がり、簡単に身支度を済ませると、ドアスコープで外の様子を窺った。

誰もいない。

おそろおそろドアを開けてみる。

太陽の光が眩しかった。

光の強さに、くらくらしながらも、陽咲は指定された住所に向かって、黙々と歩いた。部屋の中に現れた猿は、いったい何だったの？

夏菜の言う通り幻覚だったってこと？

だとしたら、どうして、陽咲の電話は、繋がらなかったのだろう？

答えの見つからない疑問が、際限なく湧いてくる。

気付いたときには、白い箱のような形をした研究棟の前に辿り着いていた。そういえば、この建物を、ごく最近、見た気がする。

——何処で見たのだろうか？

上手く思い出すことができなかった。

取り敢えず、スマホを取り出し、夏菜に電話をする。

「着いたよ」

「中にいるから、入って来て」

「分かった」

陽咲は、言われるままに、正面玄関の扉を開けた。中は薄暗かった。

足許に目を向けると、赤黒い染みのようなものがこびりついていてた。

——あれ？

急に、陽咲の記憶が蘇よみがえった。やっぱり、陽咲はこの場所を見ている。そうだ。ショウセキの配信だ。

彼が、生配信をしていたのが、この建物だったはずだ。

「夏菜。何処にいるの？」

陽咲は、声を上げながら、真っ直ぐに伸びる廊下を進んで行く。

建物の奥に入るうちに、太陽の光が届かなくなり、どんどんと暗さが増していく。空気も、重くなっていくような気がした。

さらに奥に進もうとしたところで、スマホにメッセージが届いた。差出人はTAKEだった。

昨晚のことが脳裏を過ったが、あの出来事が夢なのかどうかを確かめることができるかもしれないと、メッセージを開いた。

「HINATAさん。無事ですか？ 犯人の正体が分かりました。

攫猿などよりはるかに危険で質の悪いモノです。奴は恐怖を与え、

冷静な判断力を失わせた上で、誘き出すのです。あなたは狙われています。くれぐれも家から出ないで下さい。絶対に、誰も信用しないで下さい

メッセージを見るなり、陽咲の中にかかっていた靄が晴れたような気がした。

——あれ？ 私は、何でこんなところにいるんだっけ？

閉鎖され、誰もいないはずの研究棟。こんな薄暗い場所に、一人でこのことやって来るなんて、どうかしている。

普通に考えれば、夏菜が自分をこんなところに呼び出すなんて、どう考えてもおかしい。でも、夏菜は信用できる。

だって、たった一人の友だから。

「私は……」

陽咲の声を遮るように、カツン、カツン——と床を鳴らす音が響いた。

金属で床を叩くような奇妙な音——。

顔を上げると、廊下の先にある暗い部屋の中に、夏菜の姿が見えた。

「陽咲。こっちだよ」

夏菜が笑みを浮かべながら手招きしている。

「夏菜」

陽咲は、急いで彼女の許に駆け寄り、その身体を強く抱き締めた。
「ちよつと。どうしたのよ」

「だつてさ……」

涙が零れてきて、その先は言葉にならなかった。

変なことがたくさんあつて混乱していたけれど、こうして夏菜と会えたのだから、それで良しとしよう。

陽咲は、自分自身にそう言い聞かせる。

「そうだ。陽咲。ここで、ちよつと待ってて」

夏菜はそう言い、陽咲から離れると、部屋から出て行こうとする。

「ちよつと夏菜」

陽咲が慌てて呼び止めると、夏菜は入り口の扉のところで足を止め、ゆつくりと振り返った。

その表情は、笑っているようでもあり、泣いているようでもあった。

「陽咲。ごめんね」

「え？」

「私、真美先輩みたいには、なりたくなかったの。私は適性がなかったから、廃棄されるはずだったんだけど、代わりを差し出すことで、逃がしてもらふことになったの」

「代わり？」

「うん。元々、陽咲も狙われていたし、ちょうど良かったんだ」

「何の話？」

「陽咲。あなたのお陰で、私はここから逃げられるの。来てくれてありがとう。やっぱり友だちっていいね」

「ちよつと……」

陽咲が呼び止めるのも聞かずに、夏菜は入り口の扉を閉めてしまった。

闇が陽咲を包み込む。

部屋の温度が、急激に下がったような気がした。

「何なのよ……」

陽咲は、部屋から出ようと扉に向かったのだが、途中で足が止まった。

暗闇の中から、じつところちらを見ている顔があることに気付いたからだった。

あれは――。

「真美先輩？」

闇の中に、ぼっかりと真美の顔が浮かんでいた。だが、様子がおかしかった。

真美の顔は、陽咲が見上げるほどの高さに浮かんでいた。

そればかりか、逆立ちしたみたいに、顔の上下が逆になっていて、

髪の毛が重力に引かれ、だらりと垂れていた。

「あなたも、ナカマになるのね」

真美が言った。

だけど、真美の口は一つも動いていなかった。

目が段々と慣れてきて、真美の顔以外の部分が見えてきた。

その姿に、陽咲はぎよっとする。

身体は、確かに真美のものだったが、異様に長い手足は、白く、不自然な方向に曲がっていて、もはや人間のそれではなかった。

後から、無理矢理取り付けたとしか思えない。

巨大な蜘蛛くもに、人間の顔が乗っているかのようにだった。

コマ撮り動画のように、不自然にカクカクとした動きで、真美が近付いて来る。

真美先輩に——いや、アレに捕まったら、もう終わりだ。陽咲は、逃げだそうとしたのだが、何かにぶつかって倒れ込んでしまった。

陽咲の目の前に、能面のような顔があった。両眼が赤く、それが煌々と光を放っている。一見すると、それは人の形をしていた。こうこう

だが、そうではない。

その赤い眼をした異形のもの腕と足は、真美先輩のものだった。

真美先輩の手足を切断し、自分の身体に繋ぎ合わせたのだ。

——私は、真美先輩みたいになりたくない。

さつき、夏菜の言っていた言葉が脳裏を過る。

——ああ。そういうことだったのか。

今さらのように、陽咲は何が起きたのかを理解した。

——夏菜は、自分が助かるために、陽咲を騙し、この場所に誘き寄せたのだ。それに気付いたときには、もはや手遅れだった。

「私のかわいい子どもをウんで——」

赤い目をした異形のは、そう言うなり、陽咲の両手を掴んだ。きつと夏菜は、この化け物に懇願こんがんしたのだろう。自分の代わりを差し出すから、助けて欲しいと。

陽咲もそうしたい。だけど、夏菜以外に、自分の言葉を信じてくれる友だちなど、一人もない。

「友だちなんて、作らなきゃ良かった……」

陽咲は、絶望とともに口にした——。

